

# GANEF0の思い出

## ”あれから60年”

ガネフォ水球

吉田 稔

(法政大学出身)

「今、思い出す事は？」と、改めて問われても、すでに第1稿から3稿にかけて書いた事しか思い浮かばないものの、色々考える中でスポーツに限らず、世界の情勢が当時に逆戻りしつつあるような状態になってきているように感じます。

20世紀後半にかけて、ベルリンの壁崩壊とともに自由圏と共産圏との際立った壁がなくなり、スポーツの世界に本来の友好と心の繋がり、いわゆる絆と云う人間にとって最も大切な信条が育まれて、これこそスポーツ本来のあり方と喜んでいた所に、ロシアによるウクライナ侵攻により世界の分断が出来つつあり、又もや60年前のGANEF0再開があるかも知れないという環境になりつつある今日、生き残った我々メンバーにとって、この先どう対処していけばよいのか、と迷う処しきりであります。

私はGANEF0の翌年、1964年に父の後を継ぐべく故郷に帰り、その後、自分に合った仕事を見つけて独立し、現在も現役で働いていますが、その間地元の青年会議所<sup>うたい</sup>に加盟して、若き我らは手を取り合って世界を結ぶとの精神のもとに、地元河内長野市に水泳連盟をつくり、「かなづち君さようなら」と謳い、小学生の水泳教室の開催と地元小中学校へのプール設置運動から始めて、体育協会への加盟、そして、

翌年には副理事長を委嘱され、引き続いて市教委から体育指導委員を仰せつかりました。当時文部省の推進事業である“地域スポーツクラブの育成”の一環として、体育協会とスポーツレクリエーション協会を合併させて、総合スポーツ振興会を設立するための設立委員長を委嘱されて、平成15年から始まり4年がかりで19年に設立。2年後にNPO法人格を取得し、理事長に就任するや市スポーツ施設の指定管理を受けて5年、スポーツ振興と指定管理の両方を進めつつ5期、10年後初代会長に就任したものの、2年後会長を後任に譲るべく辞任した処、会長職を廃止するので単なる理事として残るよう頼まれて、今も引き続き運営に携わっている次第です。

その間、北京、ロンドン五輪のリレーでのメダリスト藤井拓郎選手、台湾デフリンピックでのバタフライメダリスト今村可奈選手、リオ五輪シンクロチームでのメダリスト丸茂圭衣選手の3人が、我が河内長野市出身のメダリストとして生まれ、私のGANEF0銀メダルを合わせて4個の国際試合のメダルが揃い、光栄にも市主催の各メダリストとの祝賀表彰式に表彰者として同席し、記念撮影が出来た事は、誠に光栄なことでありました。

大阪の東南端、和歌山県と奈良県に接した河内長野市は大楠公（楠木正成）で有名で、昔は高野山への宿場町として東西から高野街道が合流する歴史的な地域ではありますが、これといった産業はなく、人口も高齢化と共に年々減少しつつある、いわば先行きの寂しい地域です。昨今、市の方策として観光立市を謳い種々方策を立て、その一環として、私が提案した山間ハーフマラソン等の全国からの参加を見て、今後の発展は「スポーツ立市」を掲げて頑張るより手がないように考えて日々努力していますが、目下足踏みといった状態で、悩んでいるところ

であります。

先年、浦辺登氏が『アジア独立と東京五輪』（「ガネフォ」とアジア主義）や『玄洋社とは何者か』という本の46話に「東京オリンピックとガネフォ水球チーム」と題してガネフォ水球チームの事を取り上げて下さり、又引き続いて、当時日本体育大学（現在中京大学）の富田幸祐博士が「GANEF0に参加した水球チーム」という論文を発表され、当時西側世界のスポーツ連盟の大半が参加しなかったGANEF0への参加に反対を押し切って、日本水泳連盟を脱退してまで参加した我々を評価してくださった事は、昭和から平成、そして令和の時代に生きた私にとって大きな喜びで、感謝の念に堪えないところであります。

何とか世界の人々が手を取り合って心を合わせ、平和で自由な地球国といった、一体的な組織が出来ないだろうか、国連の会合の様子など報道から見聞きするたびに考え、取り敢えず残り少ない人生を、スポーツの力を利用して地元の町起こしに努力して行きたいと考えています。

GANEF0開催以来60年を期して、我々の集まりを最後にすることになり、さすがに心寂しく、同時に年齢を感じる処ですが、50数年に亘るスポーツを通した事業に、命ある限りこれまでの心情を持ち続け「ピンピンコロリ」と一時流行した言葉どおり、最後まで頑張っていきたいと改めて感じる処です。



左から吉田稔、藤井拓郎、今井加奈



左が丸茂圭衣、右が吉田稔